



日本文学の根底に流れる「源氏物語」

歴史文学部 4期

増田 一夫

日本文学を海外に紹介したドナルド・キーン博士は、古典から現代に至る日本文学の根底に「源氏物語」の精神が流れていると喝破している。すなわち、日本文学は、基本的に児女子の目を通した、人情の移ろいや儂さを肌理細かく書き込む「たおやめぶり」がベースとなって組み立てられているものが多い。逆に、男性主人公の視座から組み立てた「ますらおぶり」の文学作品は少ない上に、成功している作品は僅かに過ぎない。キーン博士は、谷崎潤一郎や川端康成の代表作の中で、「細雪」や「雪国」を例に、女性主人公がいきいきと描かれている反面、男性像がぼんやりと、性格もなよなよしく、頼りなく描かれていることに、改めて日本文学の「たおやめぶり」を指摘している。

キーン博士の幅広い読書遍歴からも、流石に漏れたであろう範疇の日本の大衆文学の中にも、「源氏物語」から深い影響を受けたと見受けられる作品もいくつか挙げる事が出来る。山崎豊子「華麗なる一族」の主人公、万俵大介は、長男、鉄平が父敬介と自分の妻寧子との間に生まれたとの疑念を持っており、この家族内の血の桎梏が、源氏物語における、光源氏と義母藤壺との間に生まれた薫を父桐壺帝が自分の子として育てる家庭内の桎梏と類似している。

日本の女流作家のさまざまな作品にも「源氏物語」のテーマやプロットを投影させた箇所は、いくつも見られる。宮尾登美子、林夫美子、宮本百合子などは、女性主人公を一層くつきりと際立たせるために、男性の目を狂言回しとして、巧みに描いている。

推理小説作家、宮部みゆきの「理由」は、競売不動産の占有妨害を主題にした作品であるが、占拠妨害の老婆の過去に家族内の血の桎梏が書き込まれており、宮部みゆきが、間違いなく「源氏物語」を読んでいたことを推察させる。